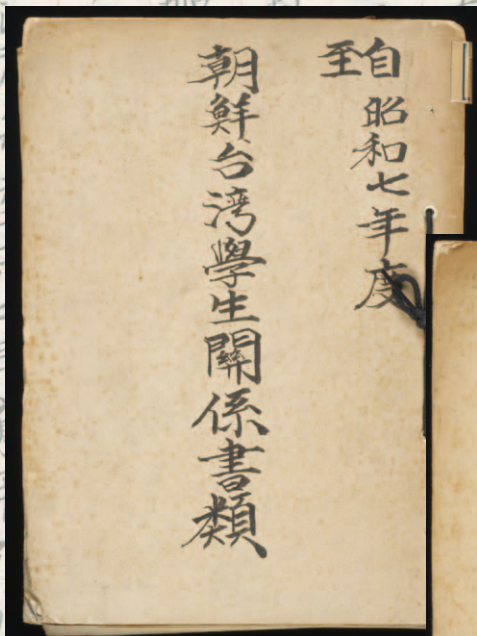


東京大学 文書館ニュース

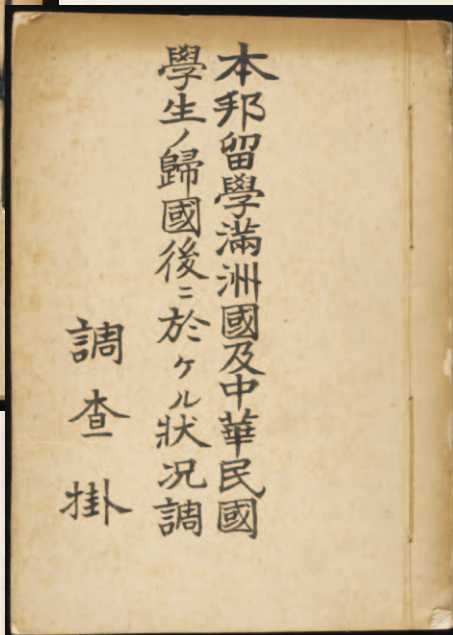
The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 73, Sep. 2024

留学生に関する資料群を 当館デジタル・アーカイブで公開



(上) S0008/SS4/02『自昭和七年度至〔十三年度〕朝鮮、台湾学生関係書類』



(下) S0008/SS4/01『本邦留學満洲國及中華民国学生ノ歸國後ニ於ケル状況調査掛』

当館へ寄せられるレファレンスの中に、しばしば留学生に関する問い合わせがあります。そこで帝国大学期までの関連資料としてご案内することが多い資料群『外国関係・留学生関係』（S0008）のデジタル化を行い、当館デジタル・アーカイブ上で公開しました。



画像はこちらから
ご覧いただけます

Contents

2 来し方とシリーズ・システム

梅藤夕美子

4 演習林が文書館と連携することで目指したいこと

藤原 章雄

6 業務日誌（抄） （2024年2月～2024年7月）

7 資料の公開について

8 文書館トピックス デジタル・アーカイブで動画資料公開開始

森本 祥子、小澤 梓、元 ナミ

柏分館に閲覧室を整備しました



柏分館は本年2月から5月にかけて、大規模修繕工事を実施しました。書架配置を見直したことで、書架総延長を増やすと同時に、書庫の一部を専用の閲覧室として利用できるようにしました。



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

来し方とシリーズ・システム

東京大学文書館 特任研究員 梅藤夕美子

はじめに

本年（2024年）4月に東京大学文書館に着任しました梅藤夕美子と申します。本稿では、自己紹介を兼ねて、私が歴史資料を面白いと思い続けてきた結果、日本近現代史とアーカイブズ学の二足の草鞋を履いて東京大学文書館に辿り着くまでと、当館で考え方を導入しているシリーズ・システムへの感想をお話しようと思います。

1. 「アーキビスト」という職業との出会い ～真実と自分の良心に忠実な存在

ロシア語通訳者でもあった作家の故・米原万里さんが生前発表した唯一の長編小説に『オリガ・モリソヴナの反語法』（集英社、2002年）という作品があります。主人公の志摩は、1960年代前半、少女時代をチェコスロバキアで過ごし、通っていたソビエト大使館付属学校でオリガ・モリソヴナという名物舞踏教師と出会いました。約30年後、ソ連邦崩壊後にロシアを訪れた志摩は、オリガ・モリソヴナについて調べます。1人のダンサーの人生から、民衆にとって過酷だったソビエト現代史が浮き彫りになっていくのです。

私がこの本を手にとったのは、歴史学を志そうとしていた学部生の時でした。この小説が主な時代とするのは、ソ連という巨大な国家が崩壊した直後。市場経済を導入したばかりのロシアの混沌とした状況が描かれています。そのような状況下において、志摩がオリガ・モリソヴナの人生を追う過程で出会うものとして、ロシアのアーカイブズが登場します。アーカイブズ機関とアーキビストは、本書の中では「真実と自分の良心に忠実なホンモノのロシアの知識人に会いたいのなら、アーカイブへ行け」（米原、前掲書、57頁。）と言われていました。同書では職業名が記されていなかったのを調べてみると、これこそが、それまで何度か耳にしていた「アーキビスト」という職業であることを知りました。アーキビストは、真実と自分の良心に忠実に従う、埋もれた歴史に光を当てる手助けをする存在として、当時の私の胸に深く刻み込まれました。

2. 二足の草鞋を履くことになった経緯 ～日本近現代史とアーカイブズ学

私は大学院で日本近現代史を専門とし、「アジア・太平洋戦争期の国民」をテーマとして研究を行いました。修士課程では、指導教員の史料分析の深さに

感銘を受け、自分も深く史料を読み込めるようになりたいと思いました。このような時に読んだのが、松尾尊兌先生の「近現代史料論」（『戦後日本への出版』岩波書店、2002年。初出は『岩波講座 日本通史』別巻3『史料論』岩波書店、1995年所収）です。日本における近現代史料の保存と利用・公開の歴史と、執筆された1995年時点での課題を叙述したこの論文によって、私は史料の伝来や保存・公開にも興味を持つようになりました。当時、学部を卒業したばかりの私は、史料に書かれている内容や書き手のことまでしか考えていませんでした。松尾先生には史料の多寡に注目するだけではなく、残存状況が僅かな史料であっても「その史料を読んだ人がいることを忘れてはいけない」と、どのような利用のされ方をしていたのかを考慮することを指摘されたことがありました。私は、史料に書かれていることだけではなく、その史料がどのような歴史を辿ってきたのかまで考えて、史料分析を行えるようになりたいと思いました。

その後、博士後期課程へ進学した私は、大学文書館で資料整理のアルバイトをすることになりました。文書館では法人文書移管の補助業務を行うこともありました。部局から移送されてきた法人文書にバーコードを貼り付けたり、ファイル名を採録したり、リストと照合したりなどしていました。最初は自分が行っている作業の意味がよくわかりませんでした。ある時、部屋いっぱいにあった法人文書が、消えていました。移送されてきた法人文書を評価選別した結果、廃棄と判断した文書を運送業者が運び出したのです。私が日頃作業していた法人文書は、評価選別によって、特定歴史公文書等として保存されることが決定されたものであることがわかりました。資料の保存に関心があった私は、この評価選別というものに大変興味を持ちました。そこで、ある夏、私は、国文学研究資料館で開催されているアーカイブズ・カレッジ（史料管理学研修会）を受講することにしました。ところで、歴史学とアーカイブズ学は相互に関係するとはいえ、別の学問です。私は、アーカイブズ・カレッジで初めてアーカイブズ学を学ぶ機会を得ることができました。

3. 現場のたたき上げ

そうこうするうちに、博士後期課程の在学期限が来てしまった私は、歴史資料に関われる職を探し、生まれ故郷にある公文書館の求人に応募しました。

採用選考の面接では、公文書館で一番やってみたいことは何かと問われ、アーカイブズ・カレッジを受講したばかりで熱冷めやらぬ時期だった私は「評価選別をしてみたいです!」と答えました。こうして公文書館専門員に任用されることになり、昼間は公文書館で働き、夜や休日は歴史研究を行うという二足の草鞋を履くことになったのです。

公文書館専門員の業務は、レファレンス、所蔵資料整理、利用審査、展示作成、刊行物執筆、評価選別などアーカイブズに関するありとあらゆることに及んでいました。右も左もわからない私は、先輩たちが行っていることをひたすら見て、やってみて、業務を覚えていきました。採用された公文書館は、公文書管理法が施行された頃に公文書管理条例を制定して開館し、条例に基づきながら公文書の評価選別を行っていました。評価選別に興味を持っていた私は、偶々ですが、評価選別に力を入れている自治体アーカイブズでアーキビストの修業を行うことになりました。

私は、この館で公文書担当を2年務めさせていただきました。公文書担当は、公文書の評価選別・受入作業のマネジメントをします。私が公文書担当を務めた2年は、ちょうど現用公文書管理システムと公文書館システムのそれまでの業者との契約期間が切れ、新しい業者による新システム導入の時期でした。新システムでどのように評価選別を行っていくのか、運用方法を考えることが多かったです。より良い評価選別方法を模索するためには、条例やガイドラインに立ち返り、全体的な意義を見失わずに、原課や公文書館の現場に寄り添う必要がありました。大変でしたが、おかげで評価選別についてより深く考えることができたと思います。

4. シリーズ・システムの可能性

そして、この春、私は東京大学文書館の法人文書部門に着任しました。まさに、本稿を執筆している2024年7月は、法人文書の評価選別・移管作業の真っ最中です。

東京大学文書館では特定歴史公文書等の編成記述に、シリーズ・システムの考え方を導入しています。シリーズ・システムは、オーストラリアの文書移管の現場で生まれた編成記述方法です。フォンドではなくシリーズを記録資料群のトップレベルとして編成記述します。また、記録資料（レコード）から、作成者（コンテキスト）を分離して別個に記述し、関係が明らかになればその情報を紐づけます。日本ではシリーズ・システムはあまり導入されていません。東京大学文書館では、一先ずシリーズ・システムを部分的に導入し、特定歴史公文書等をシリーズ

ごとに編成記述しています。

まだ着任して4か月と日が浅い私ですが、シリーズ・システムについて個人的な感想を書くと、とても“楽”だと感じています。目録はシリーズごとに並び、“楽”に目的の文書を見つけ出すことができます。完結しているシリーズの場合は物理的にもシリーズごとに配架することも可能なため、出納が“楽”になります。既に同じシリーズがあれば、新たに受け入れた移管文書もシリーズの中に付け加えるだけで済むので、目録作成が“楽”です。

なにより、シリーズ・システムは現用文書の管理実態に近いと思うのです。文書作成の現場では、多くの場合、所管する業務に基づいて例年同じ名称のファイルがコピーして作られます。組織改編の際には、同じ業務を担当する部署がファイルを引き継ぎます。このファイル名をシリーズと考えればいいのではないかなと思うのです。現場では、業務を行いながら文書を作成し、ファイル管理簿へ1つ1つ必要事項を入力して登録を行っています。忙しい中行うことは大変で、文書管理が乱れる遠因にもなっています。現用文書の管理にシリーズ・システムが導入されれば、現在の日本の多くの役所で行われているようなファイル管理簿への登録が、ずっと“楽”になり、文書管理の適正化が進むのではないのでしょうか。物理的なファイルがなくなり、電子公文書となれば、よりシリーズ・システムを導入し易くなるのではないかと思います。

私は、この度、アーカイブズ編成記述システム構築・実装プロジェクトの特任研究員として採用されました。昨今のアーカイブズの国際標準の流れは、シリーズ・システムの考え方に近付いているとして、東京大学文書館内では、目録をISAD (G) とISAAR (CPF) に分離し、紐づける編成記述の研究を進めています。日本ではISAD (G) は浸透していますが、他の国際標準はあまり採用されていません。研究機関でもある大学アーカイブズは、率先して国際標準の実践例を示す使命があると思っています。

おわりに

『オリガ・モリソヴナの反語法』では、「真実と自分の良心に忠実なホンモノのロシアの知識人に会いたいのなら、アーカイブへ行け」という言葉がありました。アーキビストにとって最も大切なことは倫理規範を持つことであり、社会からもアーキビストは倫理規範に基づいて職務を全うしているのだと信用してもらえるようになることが理想だと思います。このような思いを忘れずに、日々の業務に励んでいきたいと思っています。

演習林が文書館と連携することで目指したいこと

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林フォレスト GX/DX 協創センター 助 教 藤原 章雄

1. はじめに

私は東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林に今年度から新しく設置したフォレスト GX/DX 協創センター¹に所属し、演習林のデジタルアーカイブズに関する業務を担当している。以前から個人的にはこの分野に興味があったが、本格的に演習林の事業として取り組み始めたのはここ数年のことである。農学コンテンツの情報化のためのプラットフォーム構築事業や東京大学デジタルアーカイブズ構築事業²などの関連事業と様々な学内の関連組織³から継続した支援と協力をいただくことで、演習林にデジタルアーカイブズ関連事業を立ち上げ、そして徐々に整備を進めることが出来ている⁴。ここに深く感謝申し上げたい。

ところで、文書館に少なからず興味を持ってこのニュースを読んでいる方々には、農学とか森林とかは少し興味の分野から遠いのではないだろうか。農学部は本郷地区の端っこの弥生キャンパスにあり、さらにその附属施設である演習林は遠く東京を離れた各地に点在している⁵。東大教職員であっても演習林はあまり馴染みがないのではなかろうか。縁があってこの文書館ニュースに寄稿させていただくことになったので、この機会に演習林の紹介も少々させていただきつつ、演習林がどんなことに取り組んできたのか、さらに今後文書館やその他の組織とも連携を進め何を目指したいのか、最後には私個人の妄想も含めて披露させて頂こうと思う。

2. 演習林が保管する資料

1894 年 11 月千葉県に日本で最初の大学演習林として農科大学に演習林が設置されて以来⁶、いくつかの拠点が追加されたり廃止されたりはしているが、キャンパスから遠く離れた地に多くの拠点が長年継続して存在し続けていることから、演習林には古い文書や写真や図面など後世に継承すべきと判断された資料が大事に保管されてきた。その膨大な資料のうち図面や写真についてはその一部ではあるが、先に紹介したように学内の予算を頂いて整理できたものから順次スキャンし属性データを作成して東京大学学術資産アーカイブとして公開する作業を進めてきた。しかしながら、図面や写真以外にも演習林開設当初から綿々と保管され続けている事務文書や、当時の社会情勢や森林管理の詳細が分かる業務文書や様々な形の記録などの膨大な資料については、大事に保管する以上のことはなかなか手がつけ

られていないのが実情である。また、いかに敷地的には東京のキャンパスよりは余裕があるとも言えども、当然無限に何でも保管し続けることはできず、適切に取捨選択し廃棄する必要があるのだが、資料を整理し適切に価値判断を下し保管の方針を定めることは特に困難である。さらには、資料の劣化を防ぐよう適切に管理できる保管場所を演習林独自に整備することは難しく、現状保管状況はお世辞にも良いとは言えない資料も多いという課題もある。

3. 文書館との出会い

過去に弥生キャンパスに演習林事務局という大きな事務組織が存在し全ての地方演習林を統括する事務をキャンパスで執り行っていた。その事務組織の持つ文書倉庫には演習林開設当初からの膨大な事務文書が保管されていた。大学院重点化に伴う農学部附属から農学生命科学研究科附属演習林への改組に先立って、演習林事務局は廃止されその膨大な事務文書は研究科事務に移管された。詳しいことは分からないが、その多くは処分されたようだ。しかし、そのうち歴史的に貴重で学術的に価値があると思われる資料は演習林研究部または地方演習林に保管された。その歴史的資料の中に、戦前から戦中の帝国大学時代に海外植民地に存在した大規模な演習林⁷に関する演習林事務局とそれら地方演習林との間の往復文書綴があった。これらは素人目に見ても貴重であることが分かるものだったが、今まではただ保管しているだけであった。新しいセンターで演習林の歴史的資料の利活用に取り組むことになり、心当たりの学内組織として文書館に相談したところ快く相談に乗っていただき、さらに地方演習林の資料保管状況の視察も実現した。2024 年 2 月に千葉演習林へ文書館の森本祥子准教授、秋山淳子助教、中西啓太准教授、塚原浩太郎助教に来てもらって、現地の保管状況を実際に見てもらいながら千葉演習林の担当職員とともに有益な情報交換が行えた。同様の視察を 2024 年 3 月にはオンラインで柏の文書館分館と北海道演習林の現場を繋いで実施し、現地の担当職員との情報交換も十分に行うことができた。

4. 文書館との連携

文書館との連携を検討するにあたって、演習林としては下記のような目的を想定していた。

- 文書館所属の専門の先生や職員の方に演習林が所有している東京大学の歴史を記録する貴重な資料

や事務文書綴りなどが存在することを認識していただくこと

- 演習林が今後行う資料の整理、保管、管理、活用に関してアドバイスを頂くこと
- 必要に応じて文書館と演習林が協力して、資料の整理、保管、管理、活用の業務にあたれるようにすること
- その他東京大学百五十年史の作成において、東大が地域と築いてきた関係や海外へも土地を求めてきた歴史などの主題を取り上げるなど文書館と演習林が協力して行える可能性のある事業について検討すること

しかし実際に演習林の保管する資料を一つ一つ見ていくと、すぐにでも研究者が活用したいと思うような興味深い資料が次々に現れることが分かり、興味を持ってもらえそうな研究者にこちらから声をかけて活用も同時並行に取り組むのも良いかもしれないと考えた。文書館に預かっていた海外植民地の演習林に関する往復文書綴りについて心当たりの研究者数名に声をかけて、まずは現物を見てみることにした（写真）。



文書館分室にて資料の現物を見ながら検討(2024年5月29日)

これまでも演習林で保管している資料をもとに執筆された論文はいくつかある⁸が、そのとき参考にした資料については多くの保管されている資料の中のどこかにあるということが分かっているだけで、リストが存在するわけでもなく適切に管理され利用できる状態にあるとは言い難い。まずは一次資料を保全し失われないようにすることが第一歩ではあるが、その先の利活用も含め将来世代へ良い形で資料を引き継いでいくためにはどうすべきか考えていきたい。

5. 森林のアーカイブズとは

演習林におけるデジタルアーカイブズの整備はここ数年の話だと書いたが、実は演習林では、後世に活用することができるよう森林の計測データのみな

らず演習林に関する様々な資料を独自に印刷公開する取り組みを行ってきた。昨今でいうところの「データペーパー」とも呼べるような定期刊行物「演習林」を1940年に創刊し、年に1巻出版し配布している⁹。森林における調査研究は何十年もの期間をかけて、同じ森林を計測することで初めて分析ができるということはよくあることで、計測したデータを散逸させずに数十年後に改めて確実に参照できるように出版しておくという需要があったものと思われる。オープンサイエンスを先取りした長年継続している貴重な取り組みであり、改めて評価されるべき活動だと思っている。

文書館は過去の人の営みの記録を後世に検証可能な状態で保存しようとしている。近年では人の営みがサイバー空間で行われることが多くなり、保存すべき領域もサイバー空間に広がっていくのだろう。サイバー空間には人の活動の様々な痕跡が残っていく。ある人がそこに存在したことの記録は多角的に自律的に行われていて、メールのやり取り、その人が映り込んだ写真、属していた組織が活動するために作成した様々な文書など、膨大な情報が次々と生まれているのだろう。その一方で、森林に関する記述はどうだろうか。大半の樹木は人知れず大きくなって、そして枯れ朽ちていく。国家的な森林資源の統計や、林業経営のための調査、学術的な調査が行われた森林は計測され記録される。また、個人の思い出や記録の中に森の様子が刻まれていることもあるだろう。演習林では前者のような計測データの保存と利用については取り組んできているが、人が見たもの聴いたもの触ったものなどの情報はまだうまく共有されていない。サイバー空間によりたくさんの森林の記録を残していくためには、まだまだ挑戦すべき色々な方法があるのではないかと考えている。

¹ <https://fgdc.ufau-tokyo.ac.jp/>

² 東京大学デジタルアーカイブズ構築事業 <https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/archives-top>

³ 附属図書館、情報基盤センターそして文書館など

⁴ 東京大学附属演習林画像データアーカイブズ <https://electra.lib.u-tokyo.ac.jp/utf/>

⁵ 東京大学全国施設分布図 <https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/national.html>

⁶ 南雲秀次郎(1994) 1 総説：千葉演習林 100 周年記念、演習林 = Miscellaneous Information, the University of Tokyo Forests, 32 巻, p.1-7

⁷ 東大の海外植民地の演習林は、台湾演習林(1902(明治35)年設置 57,600ha)、江原道演習林(朝鮮、1912(大正元)年設置 30,900ha)、全羅南道演習林(朝鮮、1912年(大正元)年設置 22,300ha)、樺太演習林(1914(大正3)年設置 21,000ha) 熱帯林研究所(海南島、1940(昭和15)年設置 83,000ha)

⁸ 例えば 奥山洋一郎(1999) 戦前期における東京大学演習林をめぐる縮小論議国有財産整理事業における東大の対応、東京大学農学部演習林報告、102 巻, p. 151-201 など

⁹ 雑誌「演習林」https://www.ufau-tokyo.ac.jp/publish/science/miscellaneous_information/bulletin.html

業務日誌(抄)

(2024年2月～2024年7月)

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館、(オ): オンライン

- 2/1 森本、秋山、千葉演習林視察
健康と医学の博物館にて展示「明治15年、虎列刺大流行」開始(～9/30)
千代田、東京大学経済学部創設110年記念シンポジウム参加(オ)
- 2/2 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オ)
元、小澤、全史料協近畿部会参加
- 2/8 野口貞之様より資料寄贈(F0025 史料室アルバム)
元、三重県公文書等管理審査会事前打ち合わせ(柏)
- 2/9 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オ)
653室、業者による空調工事(柏)
- 2/13 柏分館大規模改修工事のため閲覧停止(～5/31)
- 2/14 森本、元、秋山、小澤、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)と教員人名DB打合せ(オ)
- 2/15 森本、研究倫理セミナー部局取組報告会出席(オ)
- 2/16 653室、業者による空調試運転
- 2/19 元、令和5年度三重県公文書等管理審査会出席(オ)
環境整備チームによる除湿機排水作業開始(柏)
特定歴史公文書等の劣化調査完了
- 2/20 森本、安全衛生課とコロナ対応関係文書保存相談
歴史資料部門打合せ(オ)
歴史資料等分類を修正
- 2/21 森本、宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設見学(～2/22)
- 2/26 森本、アーカイブズ関係機関協議会出席
- 2/27 第108回館員打ち合わせ(柏)
森本、2023年度第2回部局CERT責任者連絡協議会出席(オ)
- 2/28 DA将来構想案検討打合せ(オ)
609室、大規模改修工事のため資料移動(柏)
- 2/29 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オ)
森本、150周年に向けた三館合同展示WG出席(オ)
書庫防虫のためのエヤローチ散布(本)
- 3/1 歴史資料部門打合せ(オ)
長野宏一郎様より資料寄贈(F0025 史料室アルバム)
- 3/2 書庫防虫のためのエヤローチ散布(本)
- 3/4 森本、国立近現代建築資料館情報小委員会出席(オ)
山田由香様より資料追加寄贈(F0306 守田亀関係資料)
本部総務課より資料寄贈(F0322 職員レクリエーション資料)
SB06室、除湿機を設定湿度60%で終日稼働(本)
- 3/5 森本、秋山、北海道演習林資料打合せ(オ)
- 3/6 NHK来館、東大NHK包括連携協定に基づく事業打合せ(本)
609事務室工事(～3/11)(柏)
- 3/8 佐志原圭子様より資料追加寄贈(F0277 公開講座受講資料)
佐藤慎一様より資料追加寄贈(F0164 佐藤慎一関係資料)
森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席
- 3/11 609室、書架入替工事(～3/12)(柏)
- 3/12 森本、全史料協役員会出席(オ)
- 3/13 森本、国立公文書館研修修了論文審査委員会出席
- 3/14 653室、空調機を更新(柏)
- 3/18 地球惑星科学専攻より資料寄贈(F0312 旧地理学教室所蔵近世日本地図関係資料)
- 3/19 森本、秋山、わだつみのこえ記念館資料調査
- 3/21 森本、倉田奨励金「研究者資料アーカイブズに関する研究会」出席(一橋大学)
- 3/26 第109回館員打ち合わせ(本)
館全員、次期DAシステム検討報告会実施(本)
館全員、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)、教員人名DB中間報告会実施(本)
- 3/27 森本、宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設からの見学対応(柏)
千代田、星野、フェリス女学院からの見学対応(本)
- 3/29 書庫防虫のためのエヤローチ散布(本)
- 3/31 千代田裕子特任研究員退職
- 4/1 梅藤夕美子特任研究員着任
社会科学研究所希望学プロジェクトより資料寄贈(F0313 社会科学研究所希望学プロジェクト資料)
- 4/4 森本、第二工学部史料について生産技術研究所と相談(オ)
- 4/8 元武田計測先端知財団専務理事大戸範雄様より資料寄贈(F0314 一般財団法人武田計測先端知財団ウェブサイト資料)
- 4/18 元、小澤、史料編纂所中村助教とDAサーバー移転に関する打ち合わせ(オ)
井上、環境安全講習会受講
- 4/22 森本、内閣府公文書管理委員会出席(オ)
- 4/23 第110回館員打ち合わせ(柏)
- 4/25 歴史資料部門打合せ(オ)
森本、150周年に向けた三館合同展示WG出席(オ)
- 4/29 令和6年春の叙勲において、元館長佐藤慎一名誉教授(中国思想文化学)が、瑞宝中綬章を受章
- 4/30 秋山、百五十年史研究会参加(オ)
書庫防虫のためのエヤローチ散布(本)
- 5/1 SB06室、除湿機設定湿度を55%に変更、およびサーキュレーター稼働(本)
空調稼働開始(ドライ、25℃)(柏)
- 5/2 609、620、659、661室、除湿機排水タンク内にカビを確認したため洗浄(柏)
- 5/7 609、620室、書架工事開始(～5/13)(柏)
- 5/10 元、一般公開担当者会議出席(オ)
- 5/13 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オ)
森本、メンタルヘルス推進担当者説明会参加(オ)
- 5/14 広報センター刊行物等引き取り(5/24)(本)
- 5/15 森本、参議院事務局、青山学院大学文学部からの見学対応(本)
- 5/16 SB06室、空調稼働(ドライ、26℃)(本)
- 5/18 元、日本図書館研究会情報組織化研究グループ2024年5月月例研究会にて報告(オ)
- 5/21 森本、全史料協打合せ(オ)
- 5/23 歴史資料部門打合せ(オ)
- 5/27 照沼康孝様より資料追加寄贈(F0226 神前燦関係資料)
- 5/28 DA将来構想案検討打合せ(本)
教員人名DB打合せ(本)
第111回館員打ち合わせ(本)
- 5/29 教員人名DB打合せ(柏)
森本、秋山、演習林資料研究会参加(柏)
- 5/30 井上、環境安全見学会出席(柏)
S110、SC105、空調稼働(ドライ、26℃)(本)
- 5/31 SB06室、除湿機設定湿度を50%に変更(本)
書庫防虫のためのエヤローチ散布(本)
- 6/4 森本、社会連携企画課とホームカミングデイについて打合せ(本)
- 6/6 森本、NHK包括連携協定関係打合せ(オ)
森本、『国際アーカイブズ週間』記念講演会参加(オ)

- 6/7 森本、元、全国公文書館長会議出席（オ）
元、一般公開担当者会議出席（オ）
- 6/10 森本、部局女性人事加速5カ年計画意見交換会出席（オ）
柏図書館 2024 年度企画展示「戦前の「帝大生」にせまる」開始
- 6/12 令和 6 年度第 1 回文書館運営委員会（オ）
元、小澤、ACA 大会報告（オ）
- 6/17 元、2024 年度第 1 回 部局情報セキュリティ責任者（部局 CISO）連絡協議会代理出席（オ）
- 6/18 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
- 6/20 歴史資料部門打合せ（オ）
環境整備チームによる書架清掃（柏）
- 6/25 DA 将来構想案検討打合せ（柏）
第 112 回館員打ち合わせ（柏）
- 6/28 書庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
DA サーバー移転作業完了
- 7/2 森本、埼玉県立文書館からの見学対応（本）
- 7/4 農学部森林動物学研究室より資料寄贈（F0310 森林動物学研究室旧蔵資料）
- 7/5 森本、総務省行政課ヒアリング対応（オ）
- 7/12 森本、150 周年に向けた三館合同展示 WG 出席（オ）
元、一般公開担当者会議出席（オ）
- 7/16 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席（オ）
- 7/17 森本、附属図書館史資料室打合せ
- 7/19 森本、ハラスメント予防担当者連絡会議出席（オ）
梅藤、江東区総務部総務課区政資料室からの見学対応（本）
生産技術研究所より資料寄贈（F0320 生産技術研究所職員親睦会誌）
- 7/24 元、アーカイブズ・カレッジ出講
- 7/25 歴史資料部門打合せ（オ）
- 7/26 森本、アーカイブズ・カレッジ出講
秋山、百五十年史編纂室インタビュー参加
- 7/29 第 113 回館員打ち合わせ（本）
- 7/30 森本、総務省行政課ヒアリング対応（オ）
- 7/31 書庫防虫のためのエヤローチ散布（本）
元、三重県公文書等管理審査会出席（オ）

資料の公開について (2024 年 2 月 1 日～2024 年 7 月 31 日)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト（目録）、既存資料群へのアイテム追加は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます
(<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>)。

※歴史資料等は 2023 年度末に分類体系を見直し、次の 6 分類に再編しました。詳細は当館デジタル・アーカイブの「資料概要」を参照ください。
総長・役員・教員資料／職員資料／学生資料／教育・研究組織資料／関係団体資料／その他

特定歴史公文書等

事務

- S0770 コミュニケーションセンター運営
S0772 大学情報データベースシステム
S0773 IR データ室会議

大学院・学部

- S0706 農学部成績原簿
S0771 総合文化研究科・教養学部 各委員会等名簿
S0776 情報学環・学際情報学府 教授会
S0777 情報学環・学際情報学府 コンプライアンス委員会

附置研究所

- S0656 社会科学研究所 東日本大震災被災地支援関係資料
S0778 社会科学研究所 社会調査・データアーカイブ研究センター協議会
S0779 社会科学研究所 研究倫理審査委員会

全学センター

- S0774 大学総合教育研究センター 運営委員会
S0775 複合型超並列スーパーコンピューティングシステム (SR11000 後継機) 調達資料

歴史資料等

総長・役員・教員資料

- F0066 黒川真頼関係文書
F0136 渡辺一夫関係資料
F0236 宇野精一関係資料
F0309 後藤次郎関係資料
F0315 有沢広巳関係資料
F0318 裏田武夫関係資料

職員資料

- F0168 吉田寿雄寄贈資料
F0311 明治新聞雑誌文庫職員回覧資料

学生資料

- F0071 佐藤謙太郎関係資料
F0170 山本謙三関係資料
F0171 石井正関係資料

教育・研究組織資料

- F0312 旧地理学教室所蔵近世日本地図関係資料
F0313 社会科学研究所希望学プロジェクト資料

その他

- F0019 梅溪昇関係資料
F0126 石川謙旧蔵戦時下教育関係資料
F0308 東京帝国大学正門写真
F0314 一般財団法人武田計測先端知財団ウェブサイト資料
F0316 学術用語審議資料
F0319 大学史史料室旧蔵資料

今期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただき、ありがとうございました。引き続き、東京大学に関する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。



文 書 館 ト ピ ッ ク ス

デジタル・アーカイブで動画資料公開開始

当館のデジタル・アーカイブ・システムでは、資料の検索結果からそのまま資料のデジタル複製が表示できるようになっている。これまで掲載してきたのはすべて静止画像であったが、このたび、初めて映像資料を載せた。

今回掲載したのは、1931（昭和6）年に行われた昭和天皇の航空研究所行幸の記録映画である。航空研究所はもともと越中島にあったが、関東大震災で損壊したため、現在の東京大学駒場Ⅱキャンパスの位置に移転新設された。それが完成した記念に、天皇の行幸を仰いだのである。

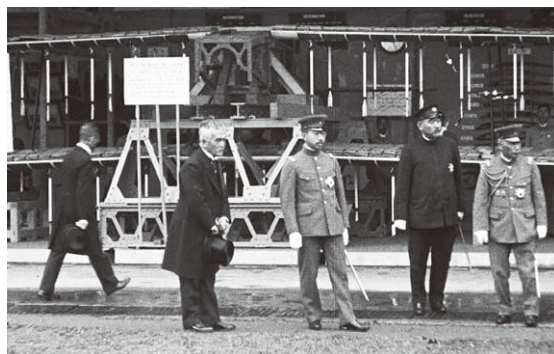
資料に添えられたメモによれば、この映画フィルムは1960（昭和35）年頃ゴミ箱から拾われたのだという。拾った立澤清彦教授が所属していた先端科学技術研究センターは、かつての航空研究所の建物にある。きっと戦前は宝のように大切に、しかし時代が下るとぞんざいに、ずっと同じ建物の中で保存されてきたのだろう。デジタル化に際して専門業者に見てもらったところ、ナイトレートフィルムであることから、当時のオリジナルフィルムだろうとのこと。保存状態がよいため、筆者は後代の複製かと思っていたが、90年ものあいだ、特別な保存環境で守られていたわけでもないのにほぼ劣化もなく今日に至るのは、実に幸いだった。今回のデジタル化に際しては、コマ単位でデジタル画像を作成したうえで、それを自然なスピードで再生されるように調整して動画として編集した。

当館のデジタル・アーカイブは、オープンソースのアプリケーションである Omeka S を使用している。階層構造の表示や異体字検索といった文書館独自の拡張機能は業者に開発を依頼したものの、日々のシステム管理やトラブルへの対処、データの登載などは当館職員が担当している。今回、映像資料の公開は初めての

試みであり、静止画同様に IIIF 規格に準拠して公開するための仕様確認が必要となった。最終的に、映像資料も他機関が開発したビューアで閲覧できる他、利用条件や所蔵機関を適切に表示することが可能になり、本資料がより広く活用される可能性が高まったことは大きな意義があるだろう。

ちなみに、この行幸実現に至る経緯は、当館に残されている大学文書から詳細に確認できる。のちに作成された記念アルバムもある。戦前のイベントが文書と映像の両方から確認できる、希少なケースである。

（森本祥子、小澤梓、元ナミ）



昭和6年航空研究所行幸記念映画
（参照コード：S0756/0001）



東京大学文書館ニュース 第73号

ISSN 0915-3284

発行日：2024年9月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

印刷所：松枝印刷株式会社



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives